

## 平成23年度金沢大学附属図書館シンポジウム

### 「芸術の普遍性を創る風土（ローカリティ）の衝撃」を開催

12月9日、創基150年記念「講演会・シンポジウム」シリーズ特別回／附属図書館シンポジウム「芸術の普遍性を創る風土（ローカリティ）の衝撃」を中央図書館オープンスタジオで開催しました。シンポジウムには、学生、教職員、一般の方を合わせて約70名の参加がありました。

今回のシンポジウムは、平成20年に60回を区切りとして一旦終了した「暁烏記念式・記念講演」を継承し、地域、社会へのより大きな貢献を目指す形に発展させたものです。

講師として金沢21世紀美術館の秋元雄史館長、東京藝術大学美術学部の日比野克彦教授、本学人間社会研究域の宮下孝晴教授をお迎えし、地域に根ざしたそれぞれの芸術的活動について語っていただきました。

まず、秋元先生から、平成19年に21世紀美術館が行った金沢の街を舞台とした展覧会「金沢アートプラットフォーム」の概要と、展覧会に出展した注目のアーティストについての紹介がありました。続いて、日比野先生から、新潟県助平（あざみひら）で始まった地域を巻き込むアートプロジェクト「明後日朝顔」誕生秘話とプロジェクトのその後の発展についての講演がありました。最後に宮下先生からフィレンツェのサンタ・クローチェ教会のフレスコ壁画修復プロジェクトにまつわる苦労話と、フィレンツェでなゼルネサンスが起こったかについてお話をいただきました。参加者は、講師が語るそれぞれの活動の舞台裏について興味深そうに耳を傾けていました。

また、柴田附属図書館長の司会で行われた鼎談では、アートの普遍性と狙い、アーティストの存在意義など多岐にわたる話題について貴重なお話を伺うことができました。各講演、鼎談後、参加者から熱心な質問があり、活発な意見交換が行われました。地域とアートのつながり、芸術とは何かを考えさせられる大変興味深いシンポジウムとなりました。

（情報企画課図書情報係 中込崇）  
【同時開催「ハートマーク♥ビューイング」については、p.7のコラムをご覧ください。】



学生からの質問に答える講師



## ワークショップ「グローバルな学術世界と研究」を開催

10月25日、創基150年記念「講演会・シンポジウム」シリーズ／附属図書館ワークショップ「グローバルな学術世界と研究—海外学術雑誌における英語論文執筆と投稿について—」と題したワークショップを自然科学系図書館AVホールで開催しました。

このワークショップは、国際オープンアクセスウィーク（10月24日から10月30日）に合わせ、本学若手研究者の研究力アップと大学の研究力の底上げを目的として開催したもので、学生・教職員合わせて約60名の参加がありました。

ワークショップでは、自然科学系の分野で活躍している本学の教員を中心とした講師陣が、英語論文執筆・投稿のノウハウと学術雑誌に掲載された論文のオープンアクセスをテーマに講演を行いました。

前半では、医薬保健研究域薬学系の早川和一教授とフロンティアサイエンス機構の福岡剛士准教授のお二人から、研究の進め方、英語論文執筆・投稿の実態、注意点などについての講演があり、研究の最前線で活躍している研究者の苦労話を伺うことができる、貴重な機会となりました。

後半は、Edanz社のワレン・レイ氏から、日本人研究者の英文の具体的な改善方法、エルゼビア・ジャパン株式会社の恒吉有紀氏、高橋昭治氏から、効率のよい論文検索法と、執筆論文のオープンアクセスについての説明が行われました。

今回のような英語論文の執筆・公開が主テーマとなる講演は珍しいためか、参加した学生、教職員は熱心に講師の話に聞き入っていました。このワークショップで使用されたスライドは、以下のページで公開しています。併せてご覧ください。  
<http://hdl.handle.net/2297/29453/>（金沢大学学術情報リポジトリ KURA）



（情報企画課雑誌・電子情報係 川井奏美）